

歴史は未来の羅針盤

温故知新

近江日野商人館では、「近江日野商人の歴史新発見展」と題して、最近見つかった日野商人の歴史に関する史・資料を展示する企画展と、日野商人の家憲を書写する体験教室を開設しています。一度、ぜひお越しください。

この治左衛門が、すでに「日野商人」と呼ばれているように、日野の原料を求めて全国で活動した人々の経験が下地となり、やがて、江戸時代の日野商人が登場した可能性があります。

日野椀は、日常的に使用する椀として生産されていたため、技術革新が進まず、美術工芸品的な他の産地物に遅れを取るようになり、今から二百年ほど前には売れなくなってしまった。

江戸時代の商人が全国で商つた物のなかで、地元の生産物は「持ち下り商品」と呼ばれています。

日野商人の持ち下り商品は、漆器(椀類)と合薬で、多くの日野商人によつて全国津々浦々に販売され、「日野椀」「日野合薬」という名で全国に知られていました。

日野椀は、江戸時代の記録では、平安時代初期に生産され始めたと伝えられ、また室町時代初期の記録にもあり、大変に長い歴史がありました。

室町時代初期の「日野市」の内の「上の市」は、椀類のみが売り買いされる集散市場であったと伝えられています。やがて、蒲生定秀によつて、日野城下が形成されると、城下の住民の七・八割が椀類の生産や販売に従事していたと伝えられています。

江戸時代初めの記録では、「近江日野」が、全国の漆器の八大生産地の一つに数えられ、また京都・大阪には、日野屋清右衛門、日野屋五郎兵衛などのように、「日野屋」の屋号を名乗つて、日野椀を専門的に販売する多くの問屋があり、当時、日野椀がブランド商品的に扱われていたことがわかります。

また、日野椀が、個々の日野商人によつて全国に販売されたことは言うまでもなく、江戸時代の記録上では、日野椀の生産や販売に従事した職人や商人の名前が、現日野町域の四十三の町・村で二百名余りも確認することができます。

つまり、椀の未完成品(半製品)を現鳥取県の山深い村で大量に作製させ、それを日野へ搬送させて、商品的に扱われていたことがわかれます。

このような椀類の半製品を求めて、全国で活動する日野の人々も多く、寛文十(一六七〇)年前後の記録に、「日野商人治左衛門」が現京都府美山町で、「江州日野安井助三郎」が現兵庫県美方町で、「江州日野伴長右衛門手代清兵衛」が現鳥取県で、「日野屋清八」が現長野県伊那市で活動するなど、多くの人々が仲買人として全国で活動していました。

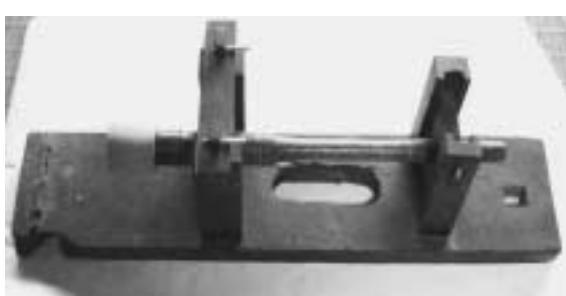
日野椀の歴史

江戸時代初めの記録では、「近江日野」が、全国の漆器の八大生産地の一つに数えられ、また京都・

木地挽
出シ
鳥取へ運送シテ
近江日
野へ回シテ交易ス

つまり、椀の未完成品(半製品)を現鳥取県の山深い村で大量に作製させ、それを日野へ搬送させて、日野の木地師や塗師たちが完成品として仕上げており、日野椀の生産は、全国の山村に住む木地師たちの下請けによつて支えられています。

このような椀類の半製品を求めて、全国で活動する日野の人々も多く、寛文十(一六七〇)年前後の記録に、「日野商人治左衛門」が現京都府美山町で、「江州日野安井助三郎」が現兵庫県美方町で、「江州日野伴長右衛門手代清兵衛」が現鳥取県で、「日野屋清八」が現長野県伊那市で活動するなど、多くの人々が仲買人として全国で活動していました。



▲ 日野椀を造ったロクロ